

カレドン

Legend of the Forgotten Reign

— 序章 —

無料試し読み

アレックス・マーレ

序章



夏はゆつくりとカレドンの地に秋の気配を譲り渡そうとしていた。数ヶ月前まで鮮やかな緑に輝いていた畑は金色を帯び、農夫たちは雨の訪れる前に収穫を終えようと休みなく働いていた。一年でもっとも骨の折れる時期だったが、同時に多くの者が心待ちにする時期でもあった。何ヶ月もの労苦がようやく確かな実りに変わる瞬間だったからだ。モンタールは熊手の柄に寄りかかり、ゆつくりと地平線へ沈んでいく太陽を眺めた。長い一日だった。北の牧場の柵の一つが夜のうちに崩れ、その修理に午前中の大半を費やすことになった。そこへさらに、逃げ出した二頭の牛と、小川のそばの泥にはまって動けなくなった荷車という問題が重なった。特別なことは何もない。田舎暮らしにありがちな苦勞にすぎない。むしろ、よく考えてみれば、そうした予測可能な日々こそが彼の好むところだった。冒険も、富も、栄光も、モンタールは一度として望んだことがなかった。一日の終わりに家へ帰れる、それだけで十分だった。少し離れた場所では、何人かの男たちが最後の干し草を荷車に積み終えようとしていた。彼らの声は虫の音や畑を渡る風の音と混じり合っていた。それは何世代にもわたってこの地の暮らしに寄り添ってきた、聞き慣れた安らかな音だった。モンタールは近くにいた何人かの隣人に会釈をし、道具を片付け始めた。年月を重ねるうちに、大地は急ぐ者を愛さないということを学んでいた。大地が求めるのは忍耐と、粘り強さと、謙虚さだ。その代わりに、生きていくのに十分なものと、記憶にしまっておけるいくつかの満足を与えてくれる。荷車に最後の道具を積みながら、彼の思いは自然とスカイラーへと向かった。ここ最近、よくあることだった。彼女が遠くにいるからではない。むしろ、長い結婚生活を経た今では、彼女の微笑みを思い出すだけで、どんな疲れも軽くなるように感じられるのだった。二人が出会ったのは収穫祭の日、まだほんの子供に毛が生えたような年頃の時きだった。太陽が若い娘の金色の髪を

照らしていた様子や、話しかけてきた誰もが自然と心を開いてしまうような彼女の振る舞いを、モンタールは今も鮮明に覚えていた。村の多くの男たちが彼女に心を奪われていたが、どういうわけかその心を射止めたのは自分だった。今でもそれを、自分の人生でいちばんの幸運だと思っている。太陽がすでに丘の向こうへほとんど姿を消した頃、馬は家へ続く小道をゆっくりと進んでいた。田園には影が長く伸び、涼しい夕暮れの風が谷間を吹き抜け始めていた。モンタールは深く息を吸い込んだ。空気には耕された土と、薪と、枯葉の匂いがした。それはカレドンの匂いだった。彼の人生の匂いだった。そのとき、少し離れた畑を一つの若い家族が横切っているのが目に入った。男が幼い娘の手を引いて歩き、その後ろを女が微笑みながらついていく。小さな娘は何かを夢中で話し、両親はそれを楽しそうに聞いていた。モンタールはしばらくその光景を眺めてから、手綱に視線を落とした。嫉妬は感じなかった。その感情はもう何年も前に彼から去っていた。代わりに感じたのは、優しい寂しさだった。一度も歩まなかった道について思うときに覚える、あの感覚に似ていた。彼とスカイラーは子を望んでいた。愛し合う二人が持ちうるすべての強さで、それを望んでいた。最初は希望を抱いた。それから祈った。そして最後には、運命がその願いに返した沈黙を受け入れることを学んだ。二人はもうほとんどそのことを話さなくなっていた。痛みが消えたからではない。ある種の傷は、自分自身の一部になってしまふからだ。時とともに血を流さなくなるだけで、本当に消え去ることは決してない。モンタールは知っていた。スカイラーが見せる以上に苦しんでいることを。村の子供たちに微笑みかけるときや、市場で若い母親をつい長く見つめてしまうときに、それが見て取れた。彼女は決して愚痴をこぼさなかった。神々を責めることもなかった。ただ、彼がずっと尊敬してきた気高さをもって、その重荷を胸に抱えていた。木立の間に自

分たちの家が見えてきたとき、モンタールは疲れがすつと軽くなるのを感じた。大きくも、とりわけ美しくもない家だった。木の柵に囲まれた質素な石造りの建物で、裏手には小さな畑があり、暖炉からはほとんど一年中煙が上っていた。それでも、そこには彼が人生をかけて築いてきたすべてがあった。梁の一本一本、石の一つ一つ、板の一枚一枚が、彼の人生の一部を物語っていた。微笑もうとしたそのとき、何かが目に残った。玄関の前に、そこにあるはずのないものがあつた。モンタールはそつと手綱を引き、馬を止めた。最初は、隣人が置き忘れた袋か、通りすがりの商人が忘れていった籠だろうと思つた。だが近づくにつれ、うまく説明のころうとしている、という感覚だつた。家の前に着くと、彼はすぐさま荷車から降りた。薄暮のせいで細部は見分けづらかつたが、それでも、古い毛布に覆われた柳細工の籠だとわかつた。しばらく身動きせず、黙つてそれを見つめていた。手紙はなかつた。印もない。なぜそこに置かれたのかを説明する手がかりは何もなかつた。モンタールはゆっくりと膝をつき、布に向かつて手を伸ばした。なぜか心臓が速く打ち始めていた。細心の注意を払つて毛布をめくると、喉の奥で息が詰まつた。籠の中では、一人の赤子が眠つていた。モンタールは動けなかつた。一瞬、自分の見間違ひだと思つた。薄暮が悪戯をしているのかもしれない。一日の疲れが感覚を狂わせているのかもしれない。だが、何度もまばたきを繰り返しても、赤子はまだそこにいた。まるでそれが世界でいちばん当たり前のことであるかのように、籠の中で眠つていた。生後数ヶ月、おそらく一年にも満たないだろう。使い込まれた毛布がほとんど全身を覆い、顔と小さな片手だけがのぞいていた。安らかに眠つていようだった。自分の存在が一つの家の静けさを、そして誰も想像すらできないところで運命そのもの

のの行方を、揺るがそうとしていることなど知る由もなかった。モンタールはすぐさま周囲を見回した。小道には誰もいなかった。屋敷を取り巻く丘は夕暮れの影に沈み、風のほかには田園から聞こえてくる物音もなかった。あの赤子をそこに置いた者は、すでに立ち去った後だった。「誰がいるか」と彼は叫んだ。声は畑の上を広がり、静寂の中に消えていった。返事はない。数秒待ってから、もう一度試した。「おい」やはり何もない。赤子がわずかに身じろぎした。小さな手が毛布から現れ、宙をつかんでまた閉じた。それから、ゆつくりと目が開いた。モンタールは、なぜあの瞬間が記憶に刻まれたのか、うまく説明できなかった。おそらくは、その眼差しに見た静けさのせいだろう。あるいは、泣き声を予期していたのに、見つけたのは好奇心だけだったからかもしれない。赤子は彼を見た。怯えているようには見えなかった。困惑しているようにも見えなかった。ただじっと見つめ、それから微笑んだ。小さな、ほとんど気づかないほどの微笑みだったが、それだけでこの農夫の心を完全に解きほぐすには十分だった。「なんてことだ……」彼はつぶやいた。ちょうどそのとき、背後で家の扉が開いた。「モンタール」スカイラーの声には、長年連れ添った夫婦だけが持つ、穏やかな親しみがこもっていた。「あなた」呼ぶ声が聞こえた気がしたの。「モンタールはわずかに振り向いた。「スカイラー……こっちへ来てくれ。」女はエプロンで手を拭きながら戸口に出てきた。夕食の支度をしていたのだろう。何歩か彼のほうへ歩み寄り、最初は彼の表情に少し苛立ったようだった。だが籠を見た。彼女の顔つきはたちまち変わった。好奇心は驚きに、驚きは戸惑いに、そして戸惑いは、もつとずつと深い何かに変わっていった。スカイラーはゆつくりと近づき、夫の隣にひざまずいた。しばらく何も言わなかった。赤子は彼女を見つめ続け、それから片手を彼女のほうへ伸ばした。女は思わず手を口元にやった。「ああ……」ほとんど

ささやきに近かった。「ああ、神様……」モントールは妻の目に涙があふれるのを見た。悲しみの涙ではなかった。まだ、そうではなかった。それは、彼女自身にもおそらく理解できていない何かから生まれた涙だった。赤子がまた手を動かした。スカイラーはわずかにためらってから、指を差し出した。赤子の小さな指がすぐさまそれをつかんだ。女は息をのんだ。モントールは彼女の肩が震えるのを見た。あの眼差しを彼は知っていた。人生でそう何度も見たことのない眼差しだった。一度目は結婚式の日。二度目は家を建て終えたとき。そして今、三度目を目にしていた。それは、思いがけない何かを前にして、自分の心が開かれていくのを感じる者の眼差しだった。「一体誰がこんなことを……」彼女はささやいた。「わからない。」「一人でここに置かれていた。」「ああ。」スカイラーはもう一度小道に目をやった。今にも誰かが現れるのを待っているかのように。だが、誰もいなかった。ただ風だけが、ただカレドンの田園にゆっくりと迫る夕闇だけがあった。「中に入れなくちゃ。」モントールはうなずいた。今度ばかりは、迷いはなかった。この赤子にどんな事情があるにせよ、ここに置き去りにするという選択肢はなかった。彼はそつと籠を持ち上げ、二人で家に入った。暖炉の暖かさがすぐさま二人を包んだ。焼きたてのパンの香りが空気に満ち、鍋が火の上でこと煮えている。見慣れた、ありふれた、ほとんど平凡と言ってもいい光景だった。それでもその夜は、すべてが違って見えた。まるで家そのものが、何かが変わりつつあるのを感じ取っているかのように。スカイラーは手早くテーブルを片付け、そこに籠を据えた。それから赤子のそばに座り、目を離さなかった。モントールはマントを脱ぎ、扉のそばに掛けた。いつもなら、一日の仕事を終えたあとの最初の関心事は夕食だった。だがその夜は、焼きたてのパンと火にかけたシチューの香りさえ、まるで別の人生のもののように感じられた。彼の注

意はすべて、この小さな客に注がれていた。「お腹を空かせているに違いないわ」と、しばらくしてスカイラーが言った。それはさほど難しい推測ではなかった。赤子の頬はわずかにこけ、手はその年齢にしては細すぎた。誰であれ、彼をこの家の戸口に置いていった者は、最近その世話をきちんとしてこなかったに違いなかった。女は立ち上がり、暖炉のそばへ行った。小さな鍋を取り、そこにミルクを注いだ。温まるのを待つ間も、赤子の様子を確かめようと何度もテーブルを振り返った。その仕草はモンタールの口元に思わぬ微笑みを生んだ。それは、スカイラーの中に前からずっと存在していると知っていながら、これまで一度も表に出る機会のない一面を目にしているような気がした。ミルクが温まると、女はテーブルに戻り、籠のそばに座った。細心の注意を払って赤子を抱き上げた。小さな体は何の抵抗もせず、それどころか自ら進んで触れ合いを求めるかのように、まるで自然なことのように頭を彼女の胸に預けた。スカイラーは息を止めた。モンタールはすぐにそれに気づいた。何も言わなかった。その必要はなかった。長年連れ添ってきたおかげで、妻がまだ言葉を見つける前に、その感情を読み取れるようになっていた。赤子は貪るようにミルクを飲み始めた。それは甘やかされた子供の仕草でも、単に空腹な子供の仕草でもなかった。むしろ、与えられたものを失うことを恐れる者の、必死な仕草だった。スカイラーは目を伏せ、赤子の黒い髪をゆっくりと撫でた。「かわいそうに」と彼女はつぶやいた。モンタールは黙っていた。彼はこれまでの人生の大半を、世界とは基本的に単純なものだと信じて過ごしてきた。人は種を蒔き、収穫し、家族を築き、正直に生きようとする。もちろん、苦しみや不公平は存在する。だがそれでも、すべてはどこか理解できる秩序に従っているように思えた。ところがその夜、彼はあらゆる論理をすり抜けていく何かの前に立たされていた。あの子は誰なのか。どこから来たの

か。なぜよりによつて自分たちの家の前に置かれたのか。考えれば考えるほど、納得のいく答えは見つからなかった。ミルクを飲み終えると、赤子は小さなため息をつき、しばらく目を閉じた。ようやく落ち着いたようだった。スカイラーは微笑んだ。モントールが見慣れているのとは違う微笑みだった。もっと明るく、もっと深く、ほとんど痛みを伴うような微笑み。女はしばらくその姿を見つめ続けたが、やがて夕食がすっかり冷めていることに気づいた。「食べたほうがいいわ」と彼女は言った。「たぶんそうだな。」二人とも動かなかった。どういうわけか、二人とも、ほんの一瞬でも離れればこの部屋に生まれた魔法が解けてしまうのではないかと恐れていた。結局、最初に動いたのはスカイラーだった。赤子を籠に寝かせ、夫とともにテーブルについて。ほとんど言葉を交わさず、二人は静かに食事をした。ときおりどちらかが振り返り、小さな体が消えてしまふのではないかと確かめるように様子をうかがった。食事が終わり、暖炉に新しい薪がくべられてようやく、会話は別の方向へ動き始めた。モントールはしばらく炎を見つめてから口を開いた。「明日、村に知らせなければな。」スカイラーは目を伏せた。それは避けられない結論だった。「わかつてる。」「誰かが捜しているかもしれない。」女はすぐには答えなかった。ただ眠っている赤子を見つめていた。「本当に、誰か来ると思う。」モントールはためらった。単純な問いだったが、答えは決して単純ではなかった。「わからない。」それは本心だった。心の奥底で、不安な予感が芽生え始めていたからだ。もしかしたら、誰も来ないかもしれない。もしかしたら、この子をこの戸口に置いた者は、すでに最終的な決断を下していたのかもしれない。もしかしたら、この命は運命に——あるいは自分たちに、委ねられたのかもしれない。その考えは、彼が認めたくなる以上に彼を動揺させた。外ではカレドンの田園が夜に包まれ、風が窓の向こうで影を踊らせる中、モン

タールとスカイラーは暖炉のそばに座り続けた。二人ともまだ、その夜が自分たちの人生でもっとも重要な夜になるとは想像していなかった。何年も先、王や英雄や国々の運命を変えることになる物語の始まりを告げる夜になろうとは。だが今のところ、そこにあるのは静かな家と、暖炉の爆ぜる音と、柳細工の籠の中で眠る赤子だけだった。そして、長い長い年月ぶりに、あの家に付きまどっていた空虚さが、少しだけ浅くなったように感じられた。スカイラーはその言葉のあと、しばらく黙り込んでいた。暖炉の炎が彼女の瞳に映り、モンタールは一瞬、妻がもう籠の中の赤子を見ているのではなく、もっとずっと遠くにある何かを見ているような気がした。おそらくは、ある記憶を。あるいは、思い描いたことはあっても一度も生きる機会のなかった、いくつもの人生のうちの一つを。長年連れ添う中で、彼はそうした瞬間を見分けられるようになっていた。説明はいらない。ただ待てばよかった。「私が何をいちばん怖がっているか、わかる」ようやく彼女が、炎から目を離さずに尋ねた。モンタールはゆっくりと首を振った。「明日、誰かがあの扉を叩くこと。」男はすぐには答えなかった。それは彼自身も抱えている恐れだった。それどころか、時間が経つほどに、その可能性は現実味を帯びていくように思えた。一人の旅人が、絶望した女が、あるいは失った我が子を探す男が現れさえすれば、この部屋に生まれた脆い均衡は壊れてしまうだろう。それでも、彼にはどうしても奇妙に思えることがあった。子供を家の戸口に置き去りにする者は、衝動的にそうするわけではない。それは決断だ。おそらくは苦しい、絶望的な決断ではあるが、それでも一つの決断なのだ。「もし誰かが捜しているなら、来るはずだ」と彼はついに言った。スカイラーはうなずいたが、その答えに安心していないのは明らかだった。しばらく、深く眠る小さな体を見つめてから、彼女は立ち上がり籠に近づいた。肩にかかった毛布を整え直し、そっと頬

に触れた。赤子はわずかに身じろぎしたが、目を覚まさなかった。モンタールは口を挟まずその様子を見守った。その瞬間、それまでただ感じていただけの何かを、はつきりと理解した。この赤子が必要としているのは、自分たちだけではない。少なくとも、それだけではない。スカイラーもまた、この子が必要としていたのだ。その気づきは、思いがけない強さで彼を打った。何年もの間、彼は妻の静かな苦しみを、なす術もなく見守ってきた。激しく、あるいは騒がしい苦しみではない。もっと向き合うのが難しい何かだった。空虚。二人の暮らしの中に、いつの間にか忍び込み、決して本当には去っていかない欠落。二人はそれと共に生きることを選び、良い日にはそれを見ないふりをし、悪い日にはそれを受け入れてきた。それでも、その空虚は一度も消え去ることはなかった。だが今、久しぶりに、その空虚は少しだけ浅くなったように思えた。「この家を建てたときのこと、覚えてる」席に戻りながら、スカイラーが尋ねた。モンタールは微笑んだ。「忘れるはずがないだろう。」「私たち、何でも知っているつもりだったわね。」「自分たちを賢いと思い込んでいたな。」「自分たちを若いと思い込んでいたわ。」「その一言が、二人に笑いを誘った。」「それだけは正しかった」と彼は返した。「それだけはな。」「しばらく、二人は思い出に浸った。石を運び、梁を切り、夏の日差しの下で屋根を組んだ日々を思い返した。犯した失敗も、口論も、当時はとてつもない大問題に思えた小さな災難さえも思い出した。年月が経つにつれ、それらの記憶は否定的な重さを失い、単に二人の物語の一部へと変わっていった。「廊下の突き当たりの部屋、覚えてる」スカイラーが尋ねた。モンタールはゆっくりとうなずいた。もちろん覚えていた。あの家を設計したとき、あの部屋には明確な目的があった。どちらも口に出してそう言ったことはなかった。それはあまりに当たり前で、説明を必要としないように思えたからだ。あの部屋は子

供部屋になるはずだった。何年もの間、二人はそう呼び続けた。あの壁の内側で眠る子供など決して現れないことが明らかになってからも。「めったに入らないの」女は打ち明けた。「たまに扉を開けて、中をのぞいて、また閉めるだけ。ばかげてるのは分かっている。」「ばかげてなどいいない。」「そうかもしれないけど。」

モンタールは首を振った。「時が経ったからといって、痛みが消えるとは限らない。」スカイラーは目を伏せた。その夜初めて、彼女は自分の悲しみを隠そうとしなかった。ただ静かに座り、火の爆ぜる音に耳を傾けていた。そのとき、籠から小さな物音がした。二人同時に振り向いた。赤子が眠ったまま寝返りを打ち、片手が毛布から滑り出ていた。それだけのことだった。だが、それだけであらゆる思考を断ち切るのに十分だった。スカイラーは思わず微笑んだ。モンタールはそれに気づき、なぜかその微笑みは、その夜起きたどんなことよりも彼の胸に響いた。なぜならそれは、自分の問題への解決策を見つけた女の微笑みではなかったからだ。それは、希望を取り戻した女の微笑みだった。そして希望というものは、彼もよく知っていたが、素晴らしくもあり、危険でもあるものだった。夜の影が家の壁に伸びていく中、彼は赤子を見つめ続けた。丘の向こうのどこかで、世界はいつも通りの歩みを続けていた。他の男たちは家族と夕食を囲み、他の子供たちは寝かしつけられ、他の旅人たちは闇に包まれた道を進んでいた。それでも、カレドンの片隅にあるこの小さな家では、何かが変わっていた。突然ではなく。あからさまでもなく。だが確実に。モンタールもスカイラーも、まだそれを認める心の準備はできていなかった。それでも、二人の一部はすでに決断を下しており、翌朝にはそれを理屈で必死に正当化しようとすることになる。彼らの心は、頭よりもずっと先に選択を終えていたのだ。家はゆっくりと静寂の中に沈んでいった。空虚な静寂ではなく、二人の人間が、あらゆる瞬間を言葉で埋める必要

を感じないときに生まれる静寂だった。暖炉の爆ぜる音、外壁をなでる風の音、そして赤子の規則正しい寝息が、二人を取り巻く空間を満たすのに十分なようだった。モニターは立ち上がり、暖炉にもう一本薪をくべた。炎はすぐに勢いを増し、天井に新たな影を映し出した。しばらく、燃える木を見つめていた。炎を見つめることに奇妙な安らぎを覚えることが、彼にはよくあった。あの光には、どこか古びた、心を落ち着かせるものがあった。子供の頃、暖炉のそばで父の語る話を聞きながら、幾晩も過ごしたものだ。見事な収穫の話、厳しい冬の話、大陸の半分を横断して一旗揚げようとした男たちの話。どの話にも王や英雄は出てこなかった。ただの、ありふれた人々の物語だった。だからこそ、いつも本当のことのように思えたのかもしれない。「何を考えているの」スカイラーが尋ねた。「親父のことだ。」女は微笑んだ。「あなたが彼の名前を口にするのは久しぶりね。」「そうだな。」モニターは席に戻った。しばらく黙り込んでいた。失いたくない何かを、記憶の中に探しているかようだった。「親父はいつも言っていた。人間は人生の半分を計画に費やし、残りの半分で、大切なことは思いもよらないときにやっていると気づくのには費やす、とな。」スカイラーは赤子を見た。「もしかしたら、正しかったのかもしれないわね。」「たぶんそうだろう。」女は目を伏せ、籠の縁をぼんやりと撫でた。「なぜこの子がよりによつてここに置かれたのか、理由があると思う」それは、その夜二人がすでに何度も自問してきた問いだった。モニターはゆっくりと息を吸った。「わからない。」「でも、考えたのね。」「ああ。」「それで」男はためらった。答えを恐れているからではなく、それがばかっているように思えたからだだった。「この子を置いていった者が、自分のしていることを正確に分かっていたと思う。」「スカイラーは何も言わなかった。」「村にはもっと近い家がある。他の家族もいる。俺たちより裕福な者、もっ

と良い暮らしをしている者だっている。それなのに、誰かがわざわざここまでの道のりを歩いてきた。」「わざと選ばれたと言いたいのだ。」「偶然だとは思えない、と言っているんだ。」女は考え込んだ。実際、その可能性を無視するのは難しかった。二人の家は、とりわけ人通りの多い道沿いにあるわけではない。赤子を置き去りにした者は、もっとたどり着きやすい場所に置くこともできたはずだ。村の宿の前。神殿のそば。村長の屋敷の前でさえも。それなのに、そこに置かれた。二人の戸口の前に。その事實は、どちらも深く掘り下げる勇氣を持てないまま、二人の間に宙づりになっていた。赤子が眠ったまま少し身動きした。今度は一瞬目を開け、部屋を見回してから、すぐにまぶたを閉じた。落ち着いているようだった。捨てられたばかりの生き物にしては、落ち着きすぎているほどに。「変ね」とスカイラーが言った。「何が？」「怖がっていない。」モントールは小さな体を見た。「疲れすぎているのかもしれない。」「かもしれないわね。」だが、どちらも本当に納得しているようには見えなかった。どういうわけか、この赤子は説明のつかない静けさを漂わせていた。それは世界に一人取り残された者の態度ではなかった。むしろ、ようやくあるべき場所にたどり着いた者の振る舞いのように見えた。その考えはスカイラーの心をよぎり、彼女を思わず微笑ませた。ばかげた考えだった。それでも、頭から離れなかった。時間はゆっくりと過ぎていった。やがて月が空の頂点に達し、銀色の光が窓から差し込み始めた。村も、田園も、周囲の森も、すでに深い眠りに包まれていた。モントールは、妻が眠気と闘っているのに気づいた。「休んだほうがいい。」「もう少しだけ。」「一時間前からそう言っている。」「もう少しだけ。」男は微笑んだ。変わらないものもある。スカイラーは今も昔と変わらぬ頑固さを持ち続けていて、それこそが何年も前に彼を惚れさせたものだった。「お前は手に負えないな。」「それでも私

と結婚したじゃない。」「あれが人生最初の大きな過ちだったな。」女は一瞬、憤慨したような視線を投げかけたが、それは一秒も経たないうちに笑いに変わった。モニターも笑った。赤子はわずかに身じろぎしたが、目は覚まさなかった。二人はしばらくただそこに座り、思いがけない安らぎに身を委ねていた。どちらも、その夜が——運命が本当に動き出す前の、二人の人生における最後の夜になるとは知る由もなかった。だが今のところ、未来は存在しなかった。存在するのは現在だけだった。質素な家。灯った暖炉。人生の傷にもかかわらず愛し合うことを学んだ二人。そして、一言も発することなく、すでにすべてを変え始めていた、どこからともなくやってきた赤子。時はゆっくりと流れているように感じられた。会話は間遠になり、沈黙は長くなっていったが、だからといってその意味が薄れるわけではなかった。モニターはずっと、沈黙とは単純なものだと信じてきた。年月を重ねてようやく、沈黙にはさまざまな種類があることを知った。孤独の沈黙は、胸に石のように重くのしかかる。怒りの沈黙は、どんな距離よりも人と人を引き離す。そして今、スカイラーと分かち合っているのは、また別の沈黙だった。それは理解でできた沈黙であり、口に出さなくても通じ合う思いでできた沈黙だった。女はまた籠のそばに戻っていた。自分でも気づいていないようだった。何歩か離れても、必ずまた赤子のもとへ戻ってくるのだった。眠る姿を見つめ、毛布を整え、指先で髪をそつと撫でる。それは何も考えずに生まれる、自然な仕草だった。彼女の存在の奥深くから生まれ、おそらくは何年も前から、表に出る機会を待っていた仕草だった。モニターは何も言わずにその姿を見つめていた。その瞬間、目の前に座る女は変わったわけではないのだと理解した。彼女はずっと、そういう人間だったのだ。年月がその優しさを、誰かを守りたいというその願いを作り出したわけではない。それはもともと彼女が持ってい

た資質だった。ただ、それを向ける相手が、これまでになかったただけなのだ。そのとき、スカイラーが口を開いた。「この子は、今夜のことを覚えてるかしら」その問いはモンタールを驚かせた。「大きくなったときに。」彼女はうなずいた。男は赤子を見て微笑んだ。「いや。まだ小さすぎる。」「そうよね。」スカイラーはしばらく黙ってから、こう付け加えた。「不思議ね。」「何が」この子にとって、今夜は何の意味も持たない。おそらく何の記憶も残らない。それなのに、私たちにとっては、決して忘れられない夜になる。」モンタールはその言葉について考えた。その通りだった。あの赤子にとって、これは幼い日々の数ある夜の一つにすぎないだろう。時が経てば跡形もなく消えていく夜だ。だが自分たちにとっては、すでにすべてが変わってしまった。明日どんなことが起きようと、自分たちはもう同じ人間ではいられない。農夫は立ち上がり、窓辺に近づいた。外の空は澄み渡っていた。無数の星がカレドンの田園の上に輝いていた。丘は眠り込んだように静まり、風さえも風いっていた。この完全な静けさの中で、世界は不変で永遠であるかのように見えた。それでもモンタールは知っていた。何一つ、永遠に同じままではいられないということ。それは人生が何度も教えてくれた教訓だった。季節は移ろう。人は老いる。子供は大人になる。喜びはやって来ては去っていく。苦しみでさえ、いつかは別の何かへと姿を変える。地平線を眺めながら、彼は気づいた。何年もの間、自分は自分の人生の行く末を知っていると信じていたのだと。未来はすでに書かれているのだと思っていた。これから大地を耕し、スカイラーのそばで生き、いつか見つけたときと同じ姿でこの世を去るのだろう、と。単純な人生。誠実な人生。ありふれた人生。だが今はもう、それほど確信が持てなかった。大きな冒険や、並外れた出来事を思い描いているからではない。ただ、あの赤子が自分の戸口に現れたという単純な事実そのものが、運

命がいまだに人を驚かせる力を持っていることを証明していたからだ。「モントール。」スカイラーの声が彼を現実に取り戻した。振り返ると、女は赤子を腕に抱いていた。目を覚ましたのだ。泣いてはいない。怯えているようにも見えない。ただ、まったく新しい世界を理解しようとする者の真剣さで、部屋を見つめていた。スカイラーは微笑んだ。「見て。」小さな手が炎のほうへ伸びていた。揺れる光に魅せられていた。「暖炉が気に入ったみたいね。」「見ているだけであってほしいものだ。」彼女は笑った。「もう、この子がいたずらをするんじゃないかって心配してるの。」「子供だからな。それがほとんど本分みたいなものだ。」しばらく、二人はただその姿を見つめていた。そのとき、ささいな出来事が起きた。それでも何年も経ったあと、二人ともそれを覚えていることになる。赤子はスカイラーの胸に頭を預け、ゆっくりと目を閉じた。それだけのことであった。単純で、自然で、無意識の仕草。だが、まさにその瞬間、女の内側で何かが決定的に壊れた。あるいは、修復されたのかもしれない。モントールには分からなかった。ただ、スカイラーの目に涙があふれるのを見た。悲しみの涙ではなかった。苦しみの涙でもなかった。それは、抱えきれないほど大きな感情から生まれた涙だった。女は小さな体に視線を落とし、そっと抱きしめた。まるで世界がそれを奪い去ってしまうことを恐れるかのように。まるで人生をかけてその瞬間を待っていたかのように。モントールは理解した。もう後戻りする道はないのだと。翌日何が起きようと思わなかった。この子が誰であろうと思わなかった。どこから来たのであろうと思わなかった。スカイラーにとって、この子はすでに、籠の中で見つけた見知らぬ子以上の、はるかに大切な何かになっていた。希望になっていたのだ。そして希望というものは、一度人の心に入り込んでしまえば、簡単に脇へ追いやることなどできないものだった。彼はその光景を、口を挟まずに見つめ続

けた。外では、ずっと遠くの地平線がようやくかすかに明るみ始めていた。夜明けはまだ遠かったが、夜はすでに新しい一日へと道を譲り始めていた。そして、その場にいる誰も気づかぬまま、運命もまた自らの夜明けを準備していた。 ゆっくりと、ほとんど気づかぬうちに、会話は途切れていった。話すことがなくなったからではない。ある種の夜は、言葉がもう必要でなくなる地点にたどり着くからだ。残るのはただ、思いと、愛し合う者たちの息づかいと、それを止められる者などいないと知る者の忍耐で流れ続ける時間だけだった。スカイラーは暖炉のそばの古い肘掛け椅子に落ち着いていた。赤子はその腕の中で休み、ようやく完全に安らいだ様子だった。小さな両手はゆるみ、宵の初めにつきまといていた、ほとんど気づかないほどのあの緊張も顔から消えていた。見つけて以来初めて、この子は本当に安全な場所にいるように見えた。モンタールはその光景を見つめ、胸に不思議な締め付けを感じた。痛みではなかった。幸福でさえなかった。もっと複雑な何かだった。人生を二つに分けてしまうような瞬間があるのだという気づき——これより前にあったことと、これからすること。もしかしたら、今まさにそれが起きているのかもしれない。もしかしたら、あの夜は、老いるまで彼につきまとうことになる記憶の一つになるのかもしれない。彼はまた暖炉のそばに腰を下ろし、視線を部屋のあちこちに漂わせた。どの道具にも見覚えがあった。父が作ったテーブル。結婚の日スカイラーが贈られた食器棚。道具でいっぱいの中。手縫いのカーテン。どれもが二人の物語の一部を語っていた。何年もの間、彼はその物語はもう完結したのだと思っていた。終わったのではなく、定まったのだと。すでに自分の調子と自分の道を見つけた一冊の本のように。だが今、自分が間違っていたことに気づいた。人生は、それを受け入れる用意のある者を、決して驚かせることをやめない。もう驚くことなど何もないと確信しているとき

でさえも。火は徐々に弱まっていった。モンタールはもう一本薪を足し、炎は再び勢いを取り戻した。その明かりが、眠るスカイラーの顔を照らした。彼女もまた、ついに疲労に屈していた。頭がわずかに傾き、安らぎの表情がその顔立ちを和らげていた。モンタールは、あんな微笑みを浮かべて眠る彼女を最後に見たのがいつだったか、思い出せなかった。おそらく、一度もなかったのだろう。何年もの間、彼は妻が愚痴もこぼさず、苦しみが自分という人間を変えてしまうことを許さずに、気高くその痛みと向き合う姿を見てきた。それでも、彼女の一部がずっと何かを待ち続けていることを、彼はいつも知っていた。今、その一部が、ついに答えを見つけたようだった。彼はそっと立ち上がり、毛布を手を取った。スカイラーの肩にそれをかけ、起こさないよう気をつけた。それからしばらく動かずに、女と赤子を見つめていた。二人は互いに属しているように見えた。それは筋の通らない感覚だった。それでも、無視することはできなかった。赤子は眠ったまま少し身動きし、無意識に自分を抱く体の温もりを求めた。スカイラーは目を覚まさないまま、その子をさらに引き寄せた。モンタールは微笑んだ。その瞬間、決断はすでに下されているのだと理解した。言葉によってではない。理屈によってでもない。もつとずっと深い何かによって。もし翌朝、誰もこの子を引き取りに来なければ、議論の余地などないだろう。話し合いもいらぬ。迷いもいらぬ。この子は自分たちのもとに残るのだ。男は窓辺に戻った。地平線はすでに色を変え始めていた。弱い星々が消えていき、東の丘の上には細い銀色の帯が広がっていた。夜明けが近づいていた。それとともに、問いの時間もやって来るだろう。村。説明。正式な決定。夜が先延ばしにできたすべてのこと。だが、まだだ。しばらくの間、世界は息を止めているように見えただ。それから、単純な出来事が起きた。おそらく他の誰にとっても取るに足らないと思われるような出来事

が。赤子が目を開けた。泣かなかった。ぐずりもしなかった。部屋を見た。火を見た。スカイラーを見た。最後にモニターを見た。二人の視線は一瞬交わった。そして小さな体は微笑んだ。もう一度。籠の中で見せたのと同じ微笑みだった。二人のどちらかと視線が合うたびに浮かぶ、あの同じ微笑みだった。モニターは自分の内側で何かが溶けていくを感じた。誰の前でも、そんなことは決して認めなかっただろう。だがまさにその瞬間、彼はもう見知らぬ赤子を見てはいなかった。息子を見ていた。自分の実の子ではない。まだそうではない。だが、そうなる可能性を。そしてそれは、途方もなく大きな違いだった。ちょうどそのとき、最初の陽の光が丘を越えてきた。光は窓から差し込み、テーブルを、床を、そして最後に赤子の顔をゆつくりとなでていった。スカイラーもほとんど同時に目を開けた。数秒、戸惑っているようだった。それから思い出した。小さな体に視線を落とし、微笑んだ。驚きに満ちた微笑みだった。まるで、そのすべてが今にも消えてしまうのを恐れるかのように。赤子は短い笑い声で応えた。小さな、澄んだ、純粹な音。それでも、その音は言葉よりもずっと家の中を満たすのに十分だった。モニターは窓のほうを振り返った。太陽がカレドンの上に昇りつつあった。新しい一日が始まった。この赤子がどんな道を歩むことになるのか、誰にも分からなかった。どんな友情を結び、どんな選択をし、世界にどんな爪痕を残すことになるのか、誰にも想像できなかった。今のところ、存在するのはあの家だけだった。存在するのは自分たちだけだった。そして、久しぶりに、未来はすでに敷かれた道のように見えなくなっていた。何か新しいもの、何か発見すべきものとして見えていた。夜の真ん中に、静かに、一つの単純な柳細工の籠に隠れて、彼らの戸口を叩いた何かとして。モニターはなおしばらく窓の前に立ち続けた。太陽はゆつくりと空を昇り続け、朝の光がほとんど非現実的なほどの優しさ

で田園に広がっていった。露が草の上に輝き、最初の鳥たちが鳴き声で空気を満たし始めていた。ありふれた朝だった。それでも彼にとつては、まったくありふれてなどいなかった。振り返ると、スカイラーはまだ肘掛け椅子に座っていた。赤子は目を覚まし、あらゆる細部を記憶に刻もうとする者の熱心さで部屋を見つめていた。ときおり視線が暖炉に、それから家具に、そして二人の大人の顔に注がれた。恐れる様子はまったくなかった。それどころか、すっかりくつろいでいるようだった。「お腹が空いているみたい」とスカイラーが言った。「どうしてわかるんだ」 「まるで私を食料庫みたいに見ているもの。」 モンタールは笑った。「それなら、お前の言う通りだろうな。」 女は立ち上がり、再び暖炉に近づいた。何時間ぶりかで、家は日常のありふれた仕草でふたたび活気づいた。パンが切られ、湯が沸かされ、朝食が用意された。それでも、そうした行為さえも、どこか違って感じられた。あらゆる動きに、まるでずっと前からそこにいたかのような赤子の存在が付き添っていた。食事をしながら、モンタールはそれまで見過ごしていた何かに気づいた。家は変わってなかった。壁は同じだった。家具も同じだった。暖炉も同じだった。それでも、すべてがより生き生きとして見えた。何年も閉ざされていた部屋が、突然開かれて新鮮な空気を入れたかようだった。その気づきは、思いがけない強さで彼を打った。長い間、彼はスカイラーと自分が自分たちの運命をすっかり受け入れたのだと信じていた。あの空虚と共に生きることを学んだのだと思っていた。それは本当だったのかもしれない。だが、欠落と共に生きるということは、それを感じなくなるということではないのだ。彼は赤子を腕に抱く妻を見つめた。彼女は微笑んでいた。他人に向ける親切な微笑みではない。村の祭りで見せる、礼儀正しい微笑みでもない。それは本物の微笑みだった。深いところから生まれる類の微笑みだった。モンタールは、あの微笑

みをもう一度見るためなら何でもするだろうと悟った。朝はゆっくりと過ぎていった。時間が経つにつれ、田園から最初の物音が届き始めた。遠くの荷車の音。何人かの農夫の声。世界は自分の歩調を取り戻しつつあった。そしてそれとともに、責任も戻ってきた。「村へ行かなければな」ついにモンタールが言った。スカイラーはうなずいた。驚いた様子はなかった。二人とも、その瞬間がいざれ訪れることを分かっていた。「わかつてる。」「赤子を見つけたことを、知らせなければならぬ。」「わかつてる。」「誰かがこの子だとわかるかもしれない。」「女は目を伏せた。太陽が昇って以来初めて、心配の影が再びその顔に戻った。「もし誰も気づかなかつたら」モンタールはすぐには答えなかった。小さな体を見た。赤子は毛布の端で遊んでいて、会話にはまったく気づいていなかった。「それなら、決めなければならぬだろうな。」「スカイラーは彼を見つめた。一瞬、どちらも口を開かなかつた。その必要はなかった。決断はすでに何時間も前に下されていた。夜のうちに。暖炉の前で。赤子がスカイラーの指を握りしめたときに。彼女の腕の中で眠ったときに。家の静けさが、もはや空虚に感じられなくなったときに。二人ともそれを知っていた。二人とも、知らないふりをしていた。それを現実にするには、この子を失う危険をも受け入れることを意味していたから。ちょうどそのとき、赤子が短い笑い声をあげた。モンタールとスカイラーは同時に振り返った。小さな体は二人を見つめていた。微笑んでいた。まるで、二人がまだ認められずにいる何かを、すでに理解しているかのように。モンタールは笑い出した。スカイラーも同じようにした。そして数秒の間、あらゆる恐れ、あらゆる迷い、あらゆる不安が消え去った。存在するのは自分たち三人だけだった。一人の男。一人の女。そして、どこからともなくやってきた一人の赤子。何年も後、出来事がこの赤子をカレドンの歴史に爪痕を残す人物へと変えたとき、

誰もあの朝のことを覚えていないだろう。テーブルを囲んで分け合ったパンのことも、笑い声のことも、窓から差し込む光のことも、暖炉で燃える薪の香りものことも、誰も語らないだろう。それでも、まさにそこから、すべては始まったのだ。戦争の中でも、預言の中でもなく、吟遊詩人が何世紀も語り継ぐような大事件の中でもなく。ただ、田舎の小さな家の中で、二人のありふれた人間が、捨てられた一人の赤子に心を開いたところから。なぜなら、世界を変える物語は、ほとんどいつも、そんなふうには始まるからだ。静かに。誰もその重要性に気づく前に。スカイラーがテーブルから最初に立ち上がった。ためらいがちにそうした。まるで、ほんの数分でも赤子から離れば、何かが変わってしまうのを恐れているかのように。それは理屈に合わない感覚だと、彼女自身よく分かっていた。それでも振り払うことができなかった。籠から小さな顔がのぞくのを見て以来、彼女の一部は、そのすべてがいつ消えてしまうか分からないという絶え間ない恐れの中に生きていた。「廊下の突き当たりの部屋を片付けてくるわ」と彼女は言った。モントールは顔を上げた。説明はいらなかった。二人とも、彼女がどの部屋のことを言っているのか分かっていて。一瞬、誰も口を開かなかった。それから男はゆっくりとうなずいた。「わかった。」スカイラーは戸口で立ち止まった。まるで、たった今口にした言葉の意味に、その瞬間初めて気づいたかのように。廊下の突き当たりの部屋。物置ではない。空き部屋でもない。あの部屋。誰もそれを口にする勇氣を持てなくなつてから何年も、二人の思いの中で存在し続けてきた、あの部屋。女は目を伏せ、わずかに微笑んだ。それから立ち去つた。モントールは、彼女が廊下の角を曲がつて見えなくなるまで、視線で追い続けた。少し経って、扉の開く音が聞こえた。それから静寂。彼はテーブルのそばに座り、目の前に赤子を残したまま座り続けた。見つけて以来初めて、彼はこの子と二人きりに

なった。小さな体はしばらく彼を見つめていた。まるで観察しているようだった。モンタールは一人で笑った。「なんだ」赤子はわずかに首をかしげた。「俺を尋問するつもりか」当然、返事はなかった。それでも彼は話し続けた。そうするのが自然に思えたからかもしれない。あるいは、この瞬間を何かで埋めたい気持ちがあったからかもしれない。「言っておくが、俺は子供の扱いが得意じゃないぞ。」赤子はテーブルを両手で叩いた。モンタールは笑い出した。「これは、良くない評価だと受け取っておこう。」数分が過ぎた。外では太陽が空をさらに昇り続けていた。生活はその歩みを取り戻していた。どこかで斧が木を打つ音がした。もっと遠くでは、近くの農場から動物の鳴き声が聞こえた。すべてが普段通りに見えた。それでもモンタールは、何かが永遠に変わってしまったという感覚を消せずにいた。うまく説明できなかった。この赤子と出会ってから、まだ一日も経っていない。名前も知らない。家族も知らない。過去も知らない。それでも、もうこの家からこの子の存在を取り除くことは想像しにくくなっていった。その考えは彼を怖がらせた。認めたくなる以上に。彼は立ち上がり、小さな体を腕に抱いた。そうするのは初めてだった。動きはぎこちなく、おぼつかなかった。だが赤子はまるで気にしていないようだった。ただ小さな手を彼のチュニックに置き、あたりを見回した。「お前の母さんが見たら、心配するだろうな。」その言葉を口にした瞬間、モンタールの表情がほとんど即座に変わった。彼は何も考えずにそう言っていた。お前の母さん。誰かの母ではない。お前の本当の母ではない。お前の母さん。彼は動かなくなった。赤子は変わらず部屋を見回していた。何も気づかずに。モンタールは目を伏せ、胸の中で何かが締め付けられるのを感じた。その瞬間、境界線を越えてしまったのだと悟った。いつそうなったのか、分からなかった。どうしてそうなったのかも、分からなかった。だが、それは

起きたのだ。しばらくして、廊下から足音が聞こえた。スカイラーが、顔にうつすら埃をつけ、髪にクモの巣を絡ませて戻ってきた。疲れているようだった。そして幸せそうだった。見ているだけで胸が痛くなるほどの幸せだった。「どうだった」モニターが尋ねた。「掃除することがたくさんあったわ。」「だらうな。」

「窓は汚れているし、ベッドは埃だらけ。家具もいくつか直さないよ。」モニターはうなずいた。スカイラーは口をつぐんだ。それから付け加えた。「でも、まだいい部屋よ。」男はすぐに、彼女が本当に言いたいことを理解した。家具のことでも、窓のことでも、埃のことでもない。彼女は未来のことを話していたのだ。何年もの間、あの部屋は叶わなかった夢の象徴だった。今、初めて、それは欠落を表すものではなくなっていた。可能性を表すものへと、再び変わり始めていた。モニターは赤子を見た。それから妻を見た。そしてこの信じられない出来事が始まって以来初めて、自分もまた希望を抱き始めていることに気づいた。それは危険な感覚だった。分かっていた。希望は人を幸せにすることもあれば、人を打ちのめすこともある。それでも、太陽が部屋を照らし、赤子が特に理由もなく笑っている間、その恐れは遠のいていくように見えた。少なくとも、しばらくの間は。少なくとも、外の世界がふたたび二人の戸口を叩きに来るまでは。モニターは、この瞬間が永遠に続けばいいと思った。子供っぽい、いささか幼稚な望みだったが、そう思わずにはいられなかった。何年もの間、彼の人生は予測可能な調子で進んできた。季節が次々と巡り、畑の仕事が日々を刻み、未来は何百回も歩まれた道のように見えていた。だが今は、すべてが違って見えた。良くも悪くもない。ただ違うのだ。長い間閉ざされていた扉が、突然開いて、何か新しいものを入れたかのように。スカイラーはテーブルの脇に戻り、赤子はすぐさま彼女に向かって両腕を伸ばした。その仕草はあまりに自然で、二人とも言葉を

失った。こんなに小さな生き物が、もう自分たちを信頼することを覚えているとは信じがたかったが、まさにそれが起きていることだった。女は赤子を抱き上げ、小さな体は安全な場所を見つけた者の自然さで彼女の胸に落ち着いた。「もうすでに決めているみたいだな」とモンタールが言った。スカイラーは彼を見た。「何を決めたって」。「俺たち二人のうち、どちらが好きかを。」女は笑った。「妬かないで。あなたには一晩しか、仲良くなる時間がなかったんだから。」「どうやら、一晩では足りなかったようだな。」赤子は楽しげな声をあげ、まるで会話に加わりたいたかのように両手を叩いた。しばらく、二人はただその姿を見つめていた。どんな動きも、部屋を生命で満たしているように感じられた。それはあまりに新しい感覚で、ほとんど恐ろしいほどだった。小道からの荷車の音が、その瞬間を破った。モンタールはすぐさま窓のほうを振り返った。心臓が高鳴った。一瞬、誰かがこの子を引き取りに来たのではないかと恐れた。彼は立ち上がり、窓ガラスに近づいた。一人の農夫が、ただ村へ続く道を通り過ぎていくところだった。それだけだった。それでも、その短い緊張の高まりは、彼が朝じゅう無視しようとしてきた真実を思い出させるのに十分だった。自分たちは永遠にあの家に隠れていることはできない。遅かれ早かれ、外の世界と向き合わなければならない。遅かれ早かれ、起きたことを話さなければならない。遅かれ早かれ、誰かが問いを投げかけてくるだろう。数多くの問いを。スカイラーはすぐに、彼の考えていることを察した。「今日、行かなければならないの」。「ああ。」女は目を伏せた。「そうだと思ってた。」その声に、抗議の色はなかった。愚痴もなかった。ただ、悲しい受容だけがあった。二人とも、それが正しい行いだと分かっていた。それでも、どちらもあの家を離れたくはなかった。なぜなら、あの壁の内側では、この子はただの赤子にすぎなかったからだ。外に出れば、この子は解決すべき

問題になる。説明すべき謎になる。話し合うべき責任になる。モンタールは扉に近づき、マントを手を取った。「昼食のあとに出発する。」「一人で」「そのほうがいいと思う。」「スカイラーはゆっくりとうなずいた。本当の理由は明らかだった。彼女は赤子から離れたくなかったのだ。たとえ数時間であっても。モンタールは微笑んだ。「すぐ戻る。」「わかってる。」「しばらく、どちらも口を開かなかった。そのとき、赤子がスカイラーの髪の一房をつかみ、夢中で引つ張り始めた。女は小さく驚きの声をあげた。モンタールは笑い出した。「ほら、これでこそ、本物の子供らしい。」「放して」小さな体は笑った。少なくとも、笑おうとしているようだった。結果として出てきたのは滑稽な音の連続で、それが二人をさらに笑わせた。その瞬間、小さな手の力から逃れようとするスカイラーを見つめながら、モンタールはある確信を得た。この子の運命がどんなものであれ、その到来の裏にどんな物語が隠されていようと、村がこの先の日々にどんな真実を明らかにしよう、この家で起きたことを消し去るものは何もないだろう、と。一日にも満たない間、二人は家族であるという実感を抱いていた。そしてその感覚は、本物だった。あまりにも本物で、そのほかのすべてが急に取るに足らないものに思えるほどだった。外では、太陽がカレドンの空にさらに昇り続けていた。田園は生氣を取り戻し、農夫たちは畑で働き、世界は、この小さな家で今起きていることなど知る由もなく、自らの歩みが続けていた。誰も、あの秋の夕べに静かにやってきたこの赤子が、いつか歴史に深い爪痕を残すことになるとは知らなかった。誰も、この子を待ち受ける喜びも、悲しみも、過ちも、選択も、想像することはできなかった。だが今この瞬間、そんなことはどうでもよかった。存在するのはただ現在と、暖炉の暖かさ、二人が風から炎を守るのと同じ注意深さで守っている、脆い幸福だけだった。モンタールはその日の残りの時間を、自分が

理性的に行動していると自らに言い聞かせながら過ごした。だが、スカイラーと赤子を見つめれば見つめるほど、その確信は保ちがたくなっていった。真実はもつと単純だった。どちらももう、前日までのようには物を考えていなかった。心はすでに頭よりずっと先を駆けており、この子と過ごす一時間ごとに、必要な距離を保つことが難しくなっていた。おそらくそれは避けられないことだった。ある絆は何年もかけてゆつくりと生まれる。だが別の絆は、誰の許しも求めず、ほんの一瞬で形作られる。太陽が空の頂点に達すると、スカイラーは簡単な昼食を用意した。パンとチーズ、そして前夜に残った野菜のスープ。ごちそうとは言えなかったが、どちらもそれを気にしていないようだった。赤子はすでにあらゆる思いの中心を占めていた。もつともありふれた仕草さえ、この子を中心に回っていた。眠っていれば声を落とし、動けば会話を中断し、笑えば、どんな心配もしばし遠のいた。あるとき、スカイラーは、テーブルに置かれたスプーンをぎこちなくつかもうとする赤子の姿に見入った。一度試みた。二度目も。ついに成功すると、まるで要塞を陥落させたかのように得意げにそれを掲げた。「見て、これ」と彼女は笑いながら言った。モンタールが振り返った。「思っていた以上に得意げだな。」「誰に似たのかしら。」「間違いない俺じゃないな。」「もちろんそうよね。私たち、そういうことにおきましよう。」「しばらく二人は一緒に笑った。それは軽やかな笑いで、どんな陰りもなかった。前日まで生きていたのとは、まるで別の人生に属しているような笑いだった。そのとき、誰かが扉を叩いた。一度だけ。三回の乾いた音。部屋にたちまち静寂が落ちた。モンタールとスカイラーは互いを見た。どちらも口を開かなかった。赤子は何も知らぬまま、自分のスプーンを最高の宝物のように握り続けていた。ノックがまた響いた。今度はもつと強く。モンタールはゆつくりと立ち上がった。心臓が早く打っているのを

感じた。朝じゅう先延ばしにしようとしてきた瞬間が、ついにやって来たのだ。彼は部屋を横切り、扉に近づいた。開ける前に、素早くスカイラーへ視線を送った。女は赤子をしっかりと抱きしめていた。怯えているようには見えなかった。まるで戦う覚悟ができているように見えた。その姿は、ノックの音と同じくらい彼の胸を打った。それから扉を開けた。戸口に立っていたのはホーランだった。農夫は笑った。「俺を中に入れる気があるのか、それとも冬まで待たせる気か」モンタールはしばらく動けずにいたが、やがて安堵のため息が漏れた。「まったく、心臓が飛び出るところだったぞ。」「ずいぶん温かい挨拶だな。」「ホーランは正式な招待も待たずに中へ入った。そしてスカイラーを見た。赤子を見た。そして立ち止まった。笑みが消えた。」「モンタール……」農夫はうなずいた。「知っている。」「一体何を見ているのか、説明してくれるか」この驚くべき出来事が始まって以来初めて、モンタールはこの状況がどれほど途方もないものかを実感した。見知らぬ赤子。どこからともなく現れた。二人の戸口の前に。名前もなく。家族もなく。何の説明もない。声に出して語られてもなお、その話は信じがたく聞こえた。ホーランは口を挟まずにその話を聞いた。モンタールが語り終えると、友は数秒間、黙り込んだ。「つまり、誰かが単にこの子をここに置いていったということか」「そうだ。」「そして誰も、この子が誰なのか分からない」「ああ。」「それで、お前たちはこの子を引き取ったのか。」「モンタールはスカイラーを見た。それから赤子を見た。最後にホーランへと視線を戻した。」「そうだ。」「男はため息をついた。」「そうだろうと思っていたよ。」「その言葉は二人を驚かせた。」「そうだろうと思っていた」スカイラーが尋ねた。」「お前とはもう二十年の付き合いだ」と彼は答えた。」「お前のことも知っているし、モンタールのことも知っている。もしお前たちが捨てられた赤子を見つけたなら、それを戸口の外

に放っておくなんて世界は存在しない。」入って以来初めて、ホーランは微笑んだ。おもしろがるような笑みではない。愛情のこもった笑みだった。「むしろ、逆だったら驚くところだったよ。」モンタールは目を伏せた。その言葉は、彼が認めたくなる以上に嬉しかった。なぜなら一晩じゅう、自分が過ちを犯しているのではないかと恐れていたからだ。今は、少なくとも一瞬、その恐れが軽くなったように感じられた。ホーランはゆっくりと赤子に近づいた。小さな体は好奇心たっぷりに彼を見つめた。それから微笑みかけた。また、あの微笑みだった。農夫は笑い出した。「なるほど。これでどうやってお前たちを虜にしたのか分かったよ。」スカイラーは微笑んだ。「難しいことじゃなかったわ。」「だろうな。」しばらく誰も口を開かなかった。沈黙を破ったのはホーランだった。「村は答えを求めてくるぞ、分かっているな。」「分かっている。」「問題が起きるかもしれないことも。」「分かっている。」男はうなずいた。それからもう一度赤子を見た。「それでも、それで何かが変わるとは思えないだろう。」モンタールはスカイラーを見た。スカイラーはモンタールを見た。言葉はいらなかった。答えはすでに二人の目に刻まれていた。ホーランは食い下がらなかった。彼は実際的な男で、友人たちのことをよく知っていたから、決断がすでに下されたときを見分けることができた。しばらく赤子を見つめ続けてから、テーブルの脇の椅子に腰を下ろした。小さな体はその視線を追った。一日の中に現れたその新しい顔に興味をそそられているようだった。「それで」ついに農夫が尋ねた。「計画は」モンタールは思わず小さく笑った。「もし分かっていたら、たぶん今頃はもう何時間か眠れているだろうな。」ホーランはうなずいた。「もっともな指摘だ。」しばらく、彼らはもっともありそうな可能性について話し合った。誰かがこの赤子を見分けるかもしれない。ある家族がこの子の失踪を届け出るかもしれない。も

カレドンの物語は、まだ始まったばかり……

続きは完全版でお楽しみください。

[Amazonで全編を読む →](#)